

全国科学博物館協議会平成30年度海外先進施設調査報告

ヨーロッパの博物館における巡回展示の企画立案及び運用について

《所属館園名》 国立科学博物館 《氏名》 鈴木 崇宣

1. 研修期間 平成30年10月9日(火)～10月18日(木)

2. 研修施設 Natural History Museum、British Museum、Ulster Museum

3. 具体的な実施内容

申請者の勤務する国立科学博物館では、毎年、様々な企画展示を年間通して実施している。企業や大学等の他機関の資源を活用しつつ、当館の知的・人的・物的資源等を活かして、幅広い分野の内容を取り上げ、多彩な展開を行っている。時宜を得た魅力ある展示内容であるため、当館での開催後、国内外で巡回展示としての展開が期待されることも多い。

そこで、今回、内外に巡回展示を展開する事例が豊富であり、展開先もあわせて視察できるイギリスを研修先を選定した。ロンドンのNatural History Museum、British Museumにおいては、巡回展示の内容、それらの企画立案・運用や実施体制について事前のアンケート調査及びインタビューを実施した。また、実際の巡回展示の展開の様子を視察するため、Natural History Museumからの巡回展示を実施中である北アイルランド・ベルファストのUlster Museumを訪問した。

4. 成果及び結果

(A) Natural History Museum (ロンドン)

(1) 博物館の概要

1881年、British Museumの分館として開館。8,000万点以上ものさまざまな自然史標本のコレクションを所蔵する博物館であり、毎年500万人以上の来館者を迎え入れる人気の観光スポットである。豊富なコレクションをもとにして動物、植物、地学、人類に関する常設展示や企画展示が展開されている。近年では2009年にDarwin Centreがオープンしており、ガラス越しに収蔵標本を見学することができるほか、2016年にはHintze Hallの改修に伴い、1905年以来ここで展示されていたDippyの愛称をもつディプロドクスの恐竜標本から、25mのシロナガスクジラの標本に展示替えがされている。



Natural History Museum 外観



Hintze Hallとシロナガスクジラ

(2) Natural History Museumにおける巡回展示に関して

①巡回展示を行う目的

博物館を外へ向けて公開し科学や当館調査研究の内容について伝えるため巡回展示を実施している。

②組織体制

巡回展示部門は、Natural History Museumの4つの主要な部門の1つであるPublic Engagementに属している。Public Engagementでは展示・学習・アウトリーチ(Exhibition, Learning, Outreach: ELOと略される)といった市民に関わる全てのプロジェクトを担当している。

職員数は10名の常勤職員と7名の技術職員(Exhibition technicians)であるが、プロジェクトによっては、外の部署の職員と一緒に業務を行う。たとえば、平成28年に国立科学博物館へ巡回した「大英自然史博物館展」の場合、マーケティング担当、出版担当、ライセンス担当などのほか、ほぼあらゆる研究部門の職員が関与した。

スタッフの特徴は、国際巡回展示担当者の場合、様々な経歴やバックグラウンドを有していて、職員となる前に違った経験を積んできているところにある。スタッフの出身はイギリスをはじめ、カナダ、オーストラリア、フランス、ニュージーランド、シンガポールなど多様である。国際的な博物館・科学館のリニューアル業務など、さまざまな組織での実践を通して得た経験や知識は幅広いものがある。しかし、スタッフに共通するのは、自然史を普及させたいという点である。

業務内容についてであるが、国際巡回展示担当者の場合、地区別に担当がおかれている。アジア地域、北米・オーストラリア・ニュージーランド・アフリカ地域、その他と担当地区が分かれていて、巡回先の獲得や調整を行う。このほか、マーケティング、プロジェクト管理、経理・総務、輸送、技術、設営、音響・映像、標本資料取扱者、コンテンツ開発という業務に携わる職員がおり、また、研究部門ではおよそ300名の科学者が在籍する。これらの人々が関与して、巡回展示の企画・運営をしている。

巡回展示担当職員には、少人数で多くのプロジェクトに取り組めること、そして、内外で様々な関係者とコミュニケーションを円滑に取れること、そして、展示技術からプロジェクト管理、売り込み、標本取扱に至るまでの幅広い技術が求められる。

③巡回展示の内容や事業の枠組み

【概要】

調査時点のメニューは「Ancient Oceans」「Treasures of the Natural World」「T.rex: The Killer Question」など、10種類であった。「Treasures of the Natural World」は平成28年に国立科学博物館で開催した特別展「大英自然史博物館展」のベースである。1990年以来、およそ20～30種の巡回展示を開発し、6つの大

陸、30以上の国々、300近くの展示会場で実施してきている。現時点では、7件の巡回展示を実施中であるとのことだった。なお、1990年に巡回展示を開始するきっかけとなったのは、日本のロボットメーカー・株式会社ココロ製作の恐竜ロボットだそうである。

2017年以前は、Natural History Museumで特別展として開催したものをベースにして巡回展示化していたが、最近では、常設展示コーナーをベースにし、海外への巡回を念頭に開発されたものもある(Treasures of the Natural World)。また、イギリス国内を巡回中の「Dippy on Tour」は、Natural History MuseumのHintzeホールで100年以上展示されていた同館の象徴的な恐竜展示・ディプロドクスを核にした巡回展示である。

巡回展示に含まれる展示資料は基本的にNatural History Museum所蔵コレクションで構成されるが、「Dippy on Tour」はじめ、巡回先の博物館の所蔵資料とあわせて構成されることもある。

【巡回先の獲得】

規模的に巡回展示を開催できる箇所は限られるため、ある程度絞り込みができる。そのうえで、担当者が培ってきた人的なつながりや、博物館関係者の会議の際の売込みにより、開催候補地の人が興味を持ってくれるようだったら、開催に向けた話し合いを進めていく。ただし、重要なことは、巡回展示を売り込むことばかりではなく、人的ネットワークを築くことや、知見を共有し合うこと、情報交換をしていくことであり、このような過程のなかで、巡回展示としてNatural History Museumが提供できるものは何か、といった話に結びついてくるものである。

④企画立案・制作

【テーマ決定と展示化】

(1)テーマの提案

展示テーマが提案されるきっかけはさまざまである。主に、

- ・館内で成功した企画展示をもとにする
- ・常設展示をもとにする
- ・Natural History Museumの研究者の研究成果をもとにする

といったことが挙げられる。

(2)テーマの決定

館内外の関係者でTopic Test(会議)を行い、決定する。

(3)テーマ決定のサイクル

3年間のスパンで、10～15本くらいの企画案の中から2～3本に絞り、そのうえで、企画を練り上げていく。企画が完成するまで、草案から3～5年ほどの時間をかける。

なお、展示開発後の運用期間は一般的に5年程度である。

(4)コンテンツ制作

Natural History Museumの研究や所蔵標本は、展示を通して外部へと発信する。展示としてまとめる際は、Interpretation developerによってなされる。Interpretation developerは、研究者と打合せ、展示資料を選定し、そしてそれらをどのようにストーリー展開させるのか、さらに、グラフィックや映像を使って、メッセージをどのように伝えるか、を考える。このようにして、コンテンツを制作していく。

【規模の設定】

巡回展示の規模は開催館の会場の大きさによって決まる。概して、ヨーロッパの巡回先はアジアやアメリカと比べて小さい。様々な広さに対応するため、おおよそ展示会場の広さが300㎡から1,000㎡の規模を想定して設定をしている。

【巡回先の想定】

過去の経験や、培われた人的なネットワークによる情報から、新たに開発した展示を売り込むかを見定めている。

【企画立案のための費用調達】

館内での予算措置により実施されている。

⑤運用

【巡回先の決定】

相手先から巡回展示実施の意思表示があった場合、最初に判断することはその施設において、標本資料展示が可能な環境にあるか(施設の概要、警備状況、展示場の状況)についてである。

【巡回先の決定から開催までにかかる期間】

「Treasures of the Natural World」を例にとると、巡回展示開催館と実施を決定してから開幕までにおよそ2年間かかった。

【巡回先との役割分担】

Natural History Museum はコンテンツの制作を行い、標本資料や展示内容に直接関係する事柄において責任を負っている。国際巡回展示の場合、開催館は資料輸送費、会場の展示デザイン費や設営費を負担する。更に、開催館は貸出費を負担する。貸出費は資料点数などそれぞれのケース毎で様々である。

⑥Dippy on Tour

調査時に、イギリス国内を「Dippy on Tour」が巡回中であった。恐竜・ディプロドクスを核にした巡回展示で、巡回先では、その博物館の所蔵資料とあわせて展示構成されている。上記④～⑤で紹介した巡回展示は海外をも意識したものであったが、「Dippy on Tour」は国内のみの巡回であることをはじめ、特徴的な点があることから、ここに別途紹介する。

【Dippy とは】

Dippy とは Natural History Museum の Hintze ホールに 1905 年から展示されている、全長 26m のディプロドクスの骨格標本(レプリカ)の愛称であり、イギリス国内では、いわばロックスターのような人気者とのことである。オリジナルはアメリカで発見されたもの。展示がはじまった当時は、Dippy は世界で最初に展示されたディプロドクスであった。

【巡回展示実施のきっかけ】

Hintze Hall の改修にあたり、Dippy を移動することとなった。当初は館内での移設を検討したが、有名であること、また、イギリスの国全体の資産であるということから、国内巡回という考えに至り、巡回展示を始めることとなった。

【目的】

各巡回先では、それぞれの場所の特色と Dippy とをからめた展示内容とし、家族連れや子どもたちに、身近に自然探求することを促すことを目的としている。そして、イギリス全体を巡回することを通して、巡回全体として壮大なストーリーをつくりあげる。

【巡回先】

2018～2020 年にかけてイギリス国内 8 箇所を巡回。

【巡回先の選定】

・巡回先を公募。42 箇所の申請があり、これから絞り込みをした。

・選定方針は以下 2 点。これらにかなう開催地を選定した。

①より多くの人々に接してもらうこと。

②普段科学にあまり触れない人たちに接してもらう。普段から博物館に足を運ばないような人たちを呼び寄せ、新たな来場者を掘り起こす。

・選定のポイント

①なぜ Dippy を呼びたいのかという動機。

②地方の人口分布を調べてどのような(階層の)人たちが住んでいるか。

③Dippy を展示できるスペースがあるか。

・選定先の特徴

開催後、のちのちにレガシーを残すことができるか、というところを主眼に置いて選定した。

・Natural History Museum 内部の関係者で構成する委員会で開催館を決定。

【巡回先での内容の特色】

古生物とゆかりが深い、といった科学的に特徴がある場所での開催ばかりではない。低所得者層が多く政府内で文化活動が低調な「Cool Spot」と呼ばれる地域での文化活動の力を利用した地域再生のモデルケースとすることを目的とした開催や大聖堂内で開催し科学と宗教をテーマにした展示内容とした開催なども行われる。特に、地域の社会的な情勢をも踏まえた巡回展の実施は、Natural History Museumとしては新しい試みである。

【開催費用に関して】

・Garfield Western Foundation という教育助成財団がパートナーとなって教育プログラムやマーケティングについての費用を支出。この財団は Natural History Museum から 1 名プロジェクトマネージャーを雇い、Dippy on Tour に対する費用を負担している。

・資料輸送費は協賛先の輸送業者 (WILLIAMS & HILLS) が負担している。※輸送車両には、Dippy on Tour のラッピングが施されている。

・開催館は、展示場の資料陳列、グラフィック作成・展示施工を行い、その費用を負担している。各開催地での協賛先が展示物や展示機器の提供を行う場合もある。

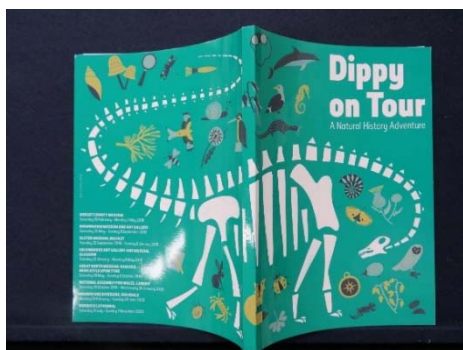
(例1)ニューカッスル

展示場のデジタルインスタレーションとして、デジタル機器を導入。デジタル機器は提携先の企業から提供。開催館がデジタル産業と新しい連携を作りレガシーを残せる、という意義がある。

(例2)バーミンガム

建設会社が全面的にバックアップ。展示及び関連事業内容ばかりでなく、協賛・サポート体制といったことにおいても、レガシーを残せるかどうか、という点がポイントとなっている。

・Natural History Museum では資料の取扱について担当職員が業務を行い、事業のサポートを通常業務の一環として、対応している。新規事業ではあるが、追加的に費用を負担しない。



Dippy on Tour のグッズ。8 つの巡回先と関係するイラストがちりばめられている。

(左：ノート、右：マグネット)

(B) British Museum (ロンドン)

(1) 博物館の概要

1753 年創立。医師であり、古美術収集が趣味で、科学的好奇心にも富んだハンス＝スローン卿 (1660-1753) が収集した古美術等の数多くの遺贈コレクション (約 7 万点) が基礎となっている。展覧会開催のために、他の博物館から展示物を借用する必要があまりない、と同館のガイドブックに記されるほどコレクションは豊富で多様であり、その数は 800 万点を超える。世界各国の先史時代から現代までの資料をコレクションに収めており、これらコレクションを保存、展示、修復、研究することにより、文化史の理解をより深めることが同館の目的である。

数多くある展示場の中には、日本企業の名を冠したギャラリーもある。インド Amaravati を紹介する朝日新聞ギャラリーや、日本文化を紹介する三菱ギャラリーがあり、このうち日本文化を紹介する展示場は、2018年9月にリニューアルオープンしたばかりである。



British Museum 外観



日本文化を紹介する三菱ギャラリー

(2) British Museum における巡回展示について

①巡回展示を行う目的

British Museum の収蔵する 800 万点を超える豊富で多様なコレクションを国内外の人々と共有することを目的としている。

②組織体制

British Museum には全体でおよそ 1 千人の職員(受付、清掃、警備などの外注職員も含む)が在籍している。大きく、Public Engagement、Administration、Collection の部門に分かれ、巡回展示担当は Public Engagement に属する。Public Engagement は Director 1 名、副 Director が 3~4 名おり、巡回展示担当のほか、広報とマーケティング担当の部署がある。巡回展示担当の職員数は、国際巡回展示担当 12 名、国内巡回展示担当 3 名、館内企画展示担当者 20 名以上である。国際巡回展示担当においては、地域で担当が分かれている。訪問時に対応して下さった方々は、アジア担当とアメリカ・オーストラリア担当であった。

スタッフの特徴として、学芸員(110 名)は大学卒業者が就職してくるが、巡回展示を含めた管理系・事務系職員は様々なバックグラウンドを持つ。巡回展示担当者を例にとると、他館での職務経験者(訪問時の対応者は、イギリス国内の他の博物館で収蔵品撮影やドキュメンタリー制作を担当していたとのこと)のみならず、ジャーナリスト・法律事務所でのマーケティング担当経験者も業務に従事している。

③巡回展示の内容や事業の枠組み

【概要】

調査時点の国際巡回展示メニューは「Rome: city and empire」「A history of the world in 100 objects」「Treasures of the world's cultures」など、15 種類であり、年間 2~3 件の新しい巡回展示の開発も進めている。国内巡回展示では、2017 年度は、およそ 10 件強実施されていた。このなかには、日本の根付をテーマにしたものも含まれている。国内巡回後、国際巡回を予定しているものもある(「Portrait of the artist: Kathe Kollowitz」)。このほか、国内向けに資料貸出も行っており、2017 年度においては、2,500 点以上の資料を 126 館へ貸出を行った実績がある。この方式においては、実施館で所蔵しているコレクションとあわせて展示を行うこともある。

【巡回先の獲得】

国際巡回展示の場合、各担当者において、各博物館との個人的な接触、人脈によって、博物館ごとの興味・関心・傾向をつかんでいて、国際会議や出張などを通じて話をして、少しずつ少しずつ信頼関係を築いている。このようにして世界中の博物館と情報交換を続けている。なかには、長年やりとりを続けているが、1

度も巡回展示を実施していないケースもある。大切なことは、人脈を拓げること、そしてコミュニケーションをとり続けることであり、会議に出席して担当者と話をするといったような個人的なつながりを長い時間をかけて培っていくことである、とのことであった。長年の信頼関係のない相手先(例えば、中国で新規開館した博物館など)では、長いつきあいのある博物館関係者から情報を収集している。息の長い、地道な積み重ねが必要である。

なお、出席をしている主な会議として、巡回展の交換に関する国際委員会 ICOM International Committee for exhibition exchange (ICEE)、IEO (International exhibition organizers)、AAM (American Alliance of Museums) とのことであった。科学系の巡回展示も対象となっているとのことである。

④企画立案・制作

British Museum にはおよそ 800 万点の収蔵資料があるが、この中から、当該分野の学芸員が展覧会における資料を選択する。国際巡回展示の場合、通例、一つの展覧会に対して、50～60 名程度の学芸員が関与する(学芸員の総数: 110 名)。例えば、「A history of the world in 100 objects」では 70 名、「Treasures of the world's cultures」では 50 名が携わった。また、「Islander: the art of life in Oceania」「Egyptian mummies: exploring ancient lives」では、分野が限定されているため、1 名の学芸員がチームリーダーとなり、その下で 50～60 名の学芸員が働く体制であった。このような体制の下で、年間 2～3 件の新しい巡回展示を企画している。

【テーマ決定と展示化】

一般的に少なくとも 3 年程度かかる。例えば、「Rome: city and empire」は、当初は国内巡回展で、ローマ時代のイギリスをテーマにしていた。国内 5 箇所を巡回した後、国際的に関心がある展示内容であろうという判断になり、展示資料を 2 倍に増やして、現行の国際巡回展示のかたちとなっている。

【規模、巡回先の想定】

時間をかけて培ってきた経験や人的ネットワークにより得た情報から、各館でどのようなものを求めているのかを見定めている。

また、巡回先の規模や館種の違い(美術館か、科学系博物館かなど)による客層の違いを想定し、規模はどの程度にするか、どのような資料を含めるか、という想定を行っている。

⑤運用

【費用について】

国際巡回展示の場合、収益を出すため、巡回先から貸出料を徴収している。政府から運営予算を削られていること、また入館料も無料であるため、収益を出すことが館として重要である。

国内巡回展示の場合、国立博物館としての役割から、貸出料は無料である。また、資料輸送費など開催に必要な経費は支援する財団(Dorset Foundation)から支出される。地方博物館の状況を鑑みて、このような方法で事業が実施されている。

(C)Ulster Museum(ベルファスト)

(1)博物館の概要

イギリス領北アイルランドの中心都市・ベルファストに所在する、国立北アイルランド博物館群(National Museums NI)の一つ。北アイルランドの歴史、芸術、歴史的工芸品、自然史標本を紹介している。なお、国立北アイルランド博物館群(National Museums NI)は、このほか、Ulster Folk & Transport Museum と Ulster American Folk Park である。



Ulster Museum 外観



紛争の歴史についても取り上げる常設展示

(2)Ulster Museum での Dippy on Tour

【開催の目的】

- ベルファストの位置する北アイルランドは、グレートブリテン島とは違った自然史上の特徴がある。展示はそこに焦点を当て、Dippy on Tour を通して、北アイルランドの自然史に興味・関心を持ってもらうことを意図している。
- ベルファストは貧困層が多く、普段あまり博物館へ来場しない層とのことである。Dippy on Tour をきっかけに、このような人々を引き寄せたい、という意図もある。

【開催期間】

2018年9月25日～2019年1月6日

【特徴】

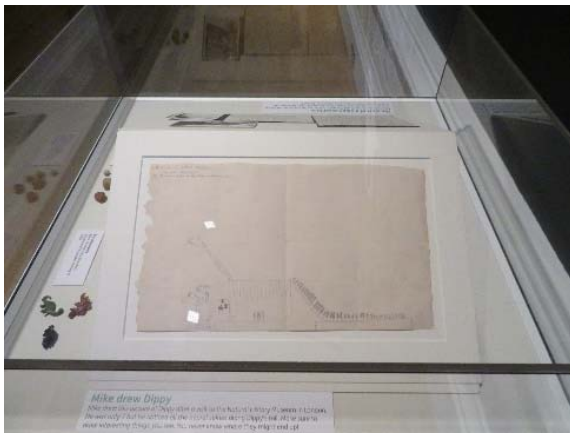
- Ulster Museum の担当学芸員は、7 才のときにロンドンの Natural History Museum を訪問し、Dippy をスケッチしていた。彼にとっては、このことがきっかけで学芸員を志すことになったが、このような個人的な経験も展示内容にからめられている。なお、展示会場では、Dippy とこの学芸員のこども姿のキャラクターが会場内でのガイド役となっている。
- アイルランドにはヘビがいない、恐竜の化石も見つかっていない、ということを説明。
- 同館で所蔵する動物、昆虫、鉱物、化石などの資料もあわせて展示している。
- 展示見学は日時予約制。同館 WEBSITE から申込をする。
- オプションのイベントとして、閉館後に行う「After Dark with Dippy」も開催。内容は、会場内での夕食会（クリスマスディナーもあった）や家族連れ向け教育プログラムなどである。



Dippy の展示



展示ガイド役の少年と Dippy キャラクター



担当学芸員が7才のときスケッチした Dippy



所蔵資料を用いた展示

5. 今後の課題等

今回の調査テーマを設定するにあたってのきっかけは、巡回展示を企画する場合、巡回先をどのように見つけ出すのか、そしてその巡回をするに当たって必要となる経費をどのように確保するのか、また、展示スペースや展示環境はどのように調整していくのか、というところであった。しかも 2019 年国際博物館会議 (ICOM) 京都大会、2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催など、日本の魅力を国内外に発信することが求められているなかで、巡回先の想定は国内はもちろん海外も含まれる。

展示スペースや展示環境の調整については、過去の経験・実績や、それらによって培われた人脈、情報収集によってされていた。

巡回先の探し方については、調査前には、各館豊富な巡回の実績を持っているところから、何か情報データベース的なものを持ち、それに基づいて行動しているのではないか、という漠然とした想像をしていた。しかし、Natural History Museum、British Museum どちらからも、地道に積み重ねた情報収集であったり、信頼関係づくりであるといった共通した答えが寄せられた。また、そのような関係づくりは必ずしも一方的な売り込みばかりではなく、博物館同士で知見を共有し合ったり、情報交換をしたり、というものであった。このようなやりとりの中で、テーマや内容が生まれ、巡回展示としてお互いに、何を提供できるか、何を提供してもらいたいのか、と話が膨らんでいく。このようなことは、巡回展示を発信する側にも受け入れる側にも共通して重要であると感じた。また、情報交換や人脈づくりの場として、巡回展の交換に関する会議があるという情報も得た。なお、巡回展のテーマ・内容について、Natural History Museum、British Museum は、由来が世界中に

わたる質・量ともに圧倒的な収蔵資料を持つという大きな強みが豊富なメニューの背景にあると考えられるが、日本の場合であれば、国際巡回展示に関しては、海外にはない日本独自のもの、海外で人気になりそうなものが、日本発のコンテンツになり得るのではないかと考える。

費用に関して、一般的に展覧会においては資料などの展示のコンテンツのほか、ケース、パネル、そして会場の造作も必要となる。Natural History Museumでは、展示コンテンツ開発を行い、その費用は経常経費で賄っており、会場造作費や資料輸送費は巡回先が負担するかたちであった。British Museumでも、同様だった。なお国内巡回展示の場合、調査した範囲では、Natural History Museumでは支援する財団や巡回先が獲得した協賛企業による費用の負担を行い、British Museumでは、支援する財団によってなされているということであった。

巡回先の探し方、費用獲得といったことはいずれも、パートナー探しである。今回の調査を通して、Natural History MuseumやBritish Museumの豊富な巡回の実績の背景には地道に積み重ねた情報収集や信頼関係づくりがあり、また、テーマや内容づくりに対しても大切であることを強く感じた。